報告

シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第３回：刈あと耕地との組み合わせ放牧利用

ハサケ県における本格的な農業開発の歴史は非常に浅く、それ以前は牧畜民が利用する空間として、広大な放牧地がひろがっていたこと*はすでに述べた。また近年の牧畜民の定住化ないし農耕化はこの土地利用の変換過程で生じたことも言及したとおりである。ハサケ農業開発の特徴としては、もともと農民がほとんどいない地域で大規模におこなわれたこと、大型機械を所有するアレッポなど都市部の商業資本階層が農業を投資対象とするアグリビジネスをいっせいに展開させたこと、の二点であるとされている**。

ハサケ農業開発は、第一段階としてコムギ、オオムギなどの穀物生産、つづく第二段階でワタの作付けへと進み、いまやハサケ県はシリアを代表する穀倉地帯であり、工芸作物の生産基地として地域ないしは国の経済発展におおきく貢献している。しかし、現代史におけるこうした土地利用ならびに居住環境の劇的改変のなかで、牧畜民は生態資源に対してどのように対処し適応していったのであろうか？そこでは、大部分の飼養家畜を手放して農業を主要な生業にするというのもひとつの選択肢であったであろうし、現実にそのような道を選んだ牧畜民も多数あった。しかし、アブドアルアジズ山地(以下、AA 山地)に半定住集落を築いた Baqqara al Jabal は、かたわらで簡単な農業にたずさわりながらも、従来どおり季節移動をくりかえし家畜飼養を維持させるという歩みをとった。平原が農業開発されたことによる草原面積の減少、とくに夏の乾季の草資源不足をどうおぎなうか？これが当時 Baqqara al Jabal の直面した大きく深刻な課題であったことは容易に想像のつくところである。しかし、かれらにとってみれば、じつは開発されたムギ作の刈あと地やワタの収穫残渣が新しい放牧資源としてすでに眼前に開かれていたことになる。このような新規飼料をかれらの牧畜へと積極的にかつ柔軟に導入したことで、草原から農耕地へというようなとりまく環境の質的かつ量的変化に対し、みごとな資源適応をとげて、伝統である移動的な生活様式を保ちつつ、それまで未利用・未開拓の資源をたくみにとりいれた新しい段階の牧畜経営へ移行していったことになる。

上記のように、Baqqara al Jabal は農業開発ひいては定住化の大きな時代潮流において、AA 山地における季節移動放牧を基本に刈あと耕地と組み合わせて、草資源の不足する夏から秋にかけて平原部へとでていく移動放牧パターンを形成した。ぎゃくに、平原部において大規模に家畜を所有する Baqqara al Jabal 以外の人々にとっても AA 山地は春季の貴重な放牧用草資源としてスポットを浴びていくことになった。



大型コンバインによる
オオムギの収穫風景



オオムギ畑の刈あと耕地放牧



牧畜民青年の出稼ぎによる
コムギ畑の灌漑作業

---

*　牧畜民(遊牧民)の襲撃がくりかえされ、治安の悪化により村落の荒廃化ないし放棄化、いわゆる<bedouinization>が進行し、現在のハサケ県をふくむジャジーラにおいて定住人口が希薄となった時代は数世紀にわたって続いたという(Wolf-Dieter Hütteroth, 1992)。定住人口がふたたび増加に転ずるのは 1950-60 以降である。

**　たとえば、Amin.S., 1976 を参照。

シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第４回：規則的遊動パターンの成立と山地草原植生への人為圧

本シリーズでこれまでとくに説明をくわえずに「資源」という言葉を繰りかえし用いてきた。ここでいう資源が何をさしているのかをすこし明確にしておきたい。資源とは、まず住民共同体との濃密で直接的なやりとりを前提とした集落ないし活動域周辺における自然である。この自然は農耕や牧畜を営むうえで不可欠な基盤となる身近な土壌、水、草原、森などをさす。またときに生業の補助手段として、あるいは本業としての採集・狩猟(漁撈をふくむ)の対象ともなる。日本の農山魚村で生活の糧、すなわち生活資源として重要な役割を果たしてきた里山の自然もここでの資源という意味合いにちかい。当該住民にとってはこの自然は直接の生活資料となると同時に現金収入の限られたなかでの生活保障の役割を果たしてきたとみられる。他方、工業化による圧倒的な資金力、購買力を背景に地球規模で大量輸送、大量循環される石油、鉱物、エネルギー、飼料用穀物、食糧などの「資源」は一応次元の異なる事項として区別して取り扱うこととしたい。

前号でみたとおり、春季においてジャジーラに残された唯一まとまった草資源としてアブド･アルアジズ山地(以下、AA 山地)の重要性が急速にクローズアップされてくることになった。ハサケ農業開発の動きのなかで牧畜民全体の関心が春季に不足する資源獲得という目的でいっきに AA 山地に向かいだした格好である。ここに夏季～秋季の平原部利用と春季の AA 山地利用とのあいだに新形式の季節往復移動が成立した(冬季は各集落周辺での利用が基本となる)。このように飼料資源の季節的･地域的な新たなる偏在に対して、牧畜民はその柔軟性および進取性をいかんなく発揮して変容した環境へとしたたかに適応していった。そして、その気質を支えたのが彼らの遊動性ないし非定住性にあったと筆者は考えている。この稀少で偏在する乾燥地資源をめぐる牧畜民の適応戦略としての遊動文化については AAINewsNo.45 でふれておいた。

しかし、春季の AA 山地への家畜群の集中化は、ひとまずいたずらに無制限・無軌道な利用にはいたらなかった。Baqqara al jabal の 5～6 支族単位による半定住集落の分布や支族間割り当てによる山地の使い分けという社会規範に由来する放牧地利用規制がはたらくことで外部牧畜民による遊動パターンについても一定の規則性を最初から有していたからである。また資源利用面からみるならば、AA 山地において放牧だけでなく、もうひとつの利用圧力が草原に対して存在している。それは牧畜民がパン焼きのための燃料集めを草原植生の優占種である shrub 類におおきく依存し、薪採取圧というファクターがたえず草原に対してかかっていることによっている。さらに詳細にみていくと放牧地選択とならんで民族植物学的に興味ぶかい牧畜民による shrub 類の選びわけという現象が認められる。こうして AA 山地の草原植生は放牧と薪採取という 2 つの人為圧をたえず受けつづけながらも、支族間の社会経済的なすみわけや資源利用における嗜好性ないし選択性から、彼らの定住化の過程をとおして、非常に規則性をもった利用パターンができあがってきたとみられる。次回は、この方向性をもった人為圧によってしだいに変化して成立した AA 山地の配列的草原植生を紹介する。



山地草原からの shrub 採取風景



ロバに薪を積みあげ家へと運ぶ



タンノールかまどで焼かれるパン